クリスチャンとしての歩み

2022/11/2
祈りの必要性③
Ⅰ列王17:8～24

神の人エリヤの祈り 2

神の人とは、神と対話し､祈りによって神様の力を現す「祈りの人」のことです。

神様のみこころは、北イスラエル王国に災いを与え､苦しめる事ではなく、民全体､惹(ひ)いては世界中の人々に、この神様こそ天地創造の神であり、他に神はないことを知らせ、悔い改めて神様に立ち返らせ、偶像礼拝を止めさせる事です。

雨が全く降らない日が一年、二年続くと、作物は枯れ､収穫量どころか肥沃な土地は荒野に変わり果てました。エリヤが雨を止めていると思ったアハブ王は血眼(ちまなこ)でエリヤを捜しましたが、真の神･主が雨を止めておられることに気づきません。

エリヤは民衆の前で偶像の神と対決することになりますが、そこに至るまでの祈りがなくては、その瞬間、真の神がエリヤの祈りに答えられるはずがありません。

日々の祈りにおける神様との対話により、神様との信頼関係は深められ、神様の心を心とし、神様と一つとなることにより、偉大な神の力を発揮できるのです。

エリコに近いケリテ川から、シドンのツァレファテまで約150㎞。約一週間の旅である。

聖書の学び

Ⅰ、謙(へりくだ)る者の祈りを聞いてくださる主　（Ⅰ列王17：9～16）

1、エリヤに与えられた指示はどのようなものでしょうか？

1)　エリヤにとって、シドンに行くことはどういう事だったでしょうか？

①シドンは妃イゼベルの母国である　（Ⅰ列王16：31）

②イスラエルのサマリヤ地域ではないので、気候が違い、少しは水がある　（Ⅰ列王18:2）

③誰もエリヤが異邦の地にいると思わない。

2)　そこに住むこと。やもめの婦人が養うように神様から命じられている。
（17：10～12）

①カラスに命じたように、やもめにも命じられている

②やもめは全く気がついていないが、主が言われた通り、町の門に来るように仕向けられている。

2、シドンのツァレファテに行く途中、やもめの婦人に語るために、主はエリヤにあらかじめ教えておられる。(アブラハムのしもべの祈りに類似)

1) 私たちが初対面の人と合うとき、神様の備えられた人と確信できる方法は、

祈りの中で、神様に「自分の決めたことを目印して下さい」とお願いすること。

※エリヤの場合は、水を飲ませて下さいと頼み、続いて、一口のパンも頼む。
（17：10～11）

2) 「かめの粉はつきず、つぼの油はなくならない」と主が言われたことを伝えて、どうするか見る。（17：13～15）

Ⅱ、祈りの中で教えられる神のみこころ

（Ⅰ列王17：17～24）

1、エリヤを養うやもめの息子が死んでしまいました。エリヤはどうしたでしょうか？

1) やもめの婦人の息子の命を失わせたのは、どなたでしょうか？

①やもめの婦人 →→ エリヤがしたように思っている。（17:18）

②エリヤ →→ 神様のなさったことだとわかっていた。

2) この時、エリヤは復活させられる偉大な神様の力を信じて、信仰のないやもめに代わって、とりなしの祈りをした。（17:20～21）

2、神様のみこころは滅び行く人と同じ姿となり、死から復活することである。（17:21）

1) かわいがり、一緒に食事し、親しく生活したであろう少年を愛する心は、滅び行くイスラエルを愛する神様の心と同じである。

2) 死んでしまった少年と同じ姿になり、祈るなら、神様は復活させて下さる。

※ 死んだようなイスラエルも、真の神を信じ、悔い改めて立ち返るなら、エリヤの祈りにより神様は復活させて下さる。